

B'AI Global Forum

活動報告書

—6年間の主な取り組みと成果—

B'AI Global Forum概要

B'AI Global Forumは、東京大学とソフトバンク株式会社が共同で立ち上げた「Beyond AI研究推進機構」の中の「AIと社会」部門内の研究グループである。「AI時代における真のジェンダー平等社会の実現とマイノリティの権利保障のための規範・倫理・実践研究」を行うことを目的として2020年7月30日に設立された。

名称の「B'」には、AI以前の言論・表現空間の歴史（before）、AI発展の背後の利害（behind）、AIの開発・生産を可能にする下部構造（beneath）、AI技術に留まらない広い社会の理解（beyond）など、AI技術を取り巻く歴史やそれを支える社会構造を多角的に考察していこうという意味が込められている。

本研究プロジェクトは、東アジアを拠点とする世界的フォーラムの創設を最終目標として掲げ、AIをはじめとするデジタル情報技術が社会に及ぼす影響を、ジェンダー、ディスアビリティ、ナショナリティ、エスニシティといった社会的属性の交差性（インターセクショナルリティ）の観点から批判的に解明し、日本社会における公正で包摂的な言論・表現空間の形成に理論的・実践的に貢献するフォーラムの形成を目指し、段階的に研究と事業を積み重ねてきた。B'AI Global Forumは、2026年3月31日をもって約6年間の活動を終了する。

活動目標・テーマ

2つの目標	① AIをはじめとするデジタル情報技術と社会との関係を反省的かつ批判的に解明すること ② 日本の公共的な言論・表現空間の公正性を実現すること
4つのテーマ	(1) AIをはじめ、デジタル情報技術による女性やマイノリティへの差別・暴力の解明 (2) AIをはじめ、デジタル情報技術による多様かつインクルーシブなメディア表現空間の設計 (3) 若手研究者を中心としたAIをめぐる文理融合・産官学民協働グローバル・フォーラムの創設 (4) デジタル情報化時代の倫理の再考、およびそれに基づくインクルーシブ教育の実践

○編著『AIから読み解く社会——権力化する最新技術』刊行（東京大学出版会、2023年）

本書では、メディア研究、言語学、歴史学、社会学、ジェンダー研究など多様な分野の研究者が、技術的な側面のみならず、政治的・社会的・文化的観点からAIや関連技術について論じている。AI技術の開発・利用がいかに社会制度や経済システムなどの権力構造と密接に関係しているのかを分析することで、AIの可能性とそれが孕む問題を明らかにした。これにより、文系・理系の区別や研究分野の壁を乗り越え、多くの人々がAIに関する対話に参加できるような環境作りのきっかけとなることを目指した。



○人工知能学会 AI-ELSI賞（展望部門）受賞

ELSI賞Perspective（展望）部門は、今後のAI研究の方向性に対して優れた倫理的視点を与える活動を表彰するものである。審査は、人工知能学会倫理委員会と学会内外の有識者による審査委員会により実施された。

受賞活動名

「Dialogue for Desirable AIプロジェクト」

本プロジェクトは、「望ましいAI（Desirable AI）」の形を検討することを目的に、東京大学B'AI Global Forum、ボン大学Center for Science and Thought、ケンブリッジ大学Leverhulme Centre for the Future of Intelligence、ヨーロッパ応用科学大学が共同で実施した対話型プロジェクトである。2024年10月から2025年1月にかけて、

「Cross-Cultural Approaches to Desirable AI」をテーマに全10回のオンラインセミナーシリーズを開催し、学术界と市民社会の幅広い層が参加した。



研究交流

これまで、日本および世界各国の大学を中心に、48機関、のべ116人と研究交流活動を行った（2026年3月時点）。



研究交流例：

- ・ 国立政治大学伝播学院（台湾）
- ・ IT for Change（インド）
- ・ ナイジェリア国立オープン大学（ナイジェリア）
- ・ ニューヨーク大学（アメリカ）
- ・ Scottish AI Alliance（スコットランド）
- ・ フランス国立研究機構 AI文化史プロジェクト CulturlA（フランス）
- ・ ヨーロッパ応用科学大学（ドイツ）
- ・ ボン大学 Center for Science and Thought（ドイツ）
- ・ ケンブリッジ大学 Leverhulme Centre for the Future of Intelligence（イギリス）

教育活動

講義例：

- ・ 東京大学「全学自由研究ゼミナール」
- ・ 上海交通大学「デジタルトランスフォーメーション（DX）で社会をジェンダー平等にする」
- ・ 福岡県立筑紫丘高等学校「人工知能と社会」
- ・ 札幌第一高等学校「人工知能と社会」

6年間の歩み

2020年度



2020年11月：MeDi（メディア表現とダイバーシティを抜本的に検討する会）がB'AI Global Forumの下部組織として活動開始

2020年12月：院生メンバー主催研究会BAIRAL 開始

2021年3月：発足イベント「AI時代におけるジェンダー正義：参加と活動をめぐる対話」開催

2021年度

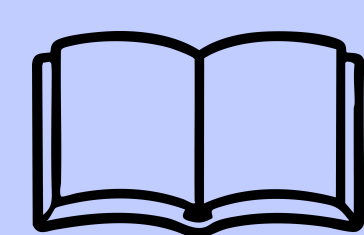


2021年5月：洋書輪読会B'AI Book Club 開始

2021年6月：トラウマレポーターティング研究会活動開始

2021年Sセメスター：全学自由研究ゼミナール開講（以降定期的に開講）

2022年度

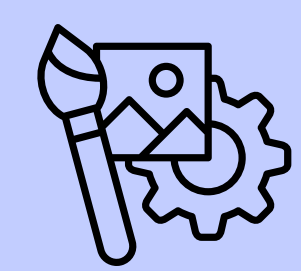


2022年5月：日本科学未来館特別展「きみとロボット：ニンゲンッテ、ナンダ？」訪問・ディスカッション

2022年11月：SoftBank本社訪問・ディスカッション

2023年3月：編著『AIから読み解く社会—権力化する最新技術』（東京大学出版会）刊行

2023年度



2023年6月：Women in Tech Lunch 開始

2023年6月：「AI/アルゴリズムとジェンダー不平等」研究グループ 活動開始

2023年9月：展示会「PERCEPTIONS: AIの語りの再構築」開催

2024年度



2024年6月：カブリ数物連携宇宙研究機構の横山広美研究室との共同研究論文が国際誌『AI & Society』に掲載

2024年10月：「若者と位置情報共有の都市比較」研究グループ 成果発表

2024年11月：設立5周年記念シンポジウム「AIとDE&I —デジタル人道主義の未来」開催

2025年度



2025年5月：BAITEQ @ SoftBank～本社見学ツアー&交流会 2025 開催

2025年6月：フランス CulturIA & B'AI 共催シンポジウム 2025「AIとアート」開催

2026年3月：ケンブリッジ大学LCFIとのジョイントワークショップ「Pro-Justice: Cross-Cultural Approaches to AI Ethics」開催



B'AI Global Forum
公式ウェブサイトでは
各プロジェクトの詳細な活動
報告をご覧ください
<https://baiforum.jp/report/>

歴代ディレクターからのご挨拶



林香里

B'AI Global Forum 創設ディレクター

東京大学大学院情報学環教授

東京大学理事・副学長

ディレクター在任期間：2020年7月～2022年9月

B'AI Global Forumの6年を終えて

2019年秋、B'AI Global Forumを立ち上げようと学内公募に応募したのは、まさに新型コロナウイルス感染症のパンデミックが世界的に拡大し始める直前のことであった。その後、感染は瞬く間に広がり、東京大学でも2020年4月から授業の全面的オンライン化が実施され、キャンパスの入構も制限された¹。パンデミックは、世界中のコミュニケーションのあり方を大きく変え、対面のやりとりが減る一方でソーシャルメディアは飛躍的に発展し、私たちの生活の隅々にまで浸透していった²。

それから約6年が経過した。パンデミックは収束したが、現在、私たちの社会はデジタル・コミュニケーションに大きく依存するものとなった。日々の活動の中で生み出される膨大なデジタルの痕跡は、大手プラットフォームに蓄積され、そのデータは人工知能の学習資源として次々と活用され、技術の急速な発展を支えている。さらに近年では、生成AIという新たなツールが爆発的に普及し、学校、職場、そして家庭に至るまで広く利用されている。いまや学び方、働き方、そして生き方に至るまで、アルゴリズム分析によって私たちの選択や判断が方向づけられる世界が到来した。

さらに、デジタル空間ではフェイクニュースやオンラインハラスメントが活発化し、民主主義の基盤や社会的信頼を切り崩し、社会問題となっている。プラットフォームの収益構造は、過激で感情をあおる言説を拡散しやすくし、その結果、差別や暴力を増幅させている。とりわけ女性やマイノリティ性をもつ人々に対する攻撃は単なる偶発的なできごとではなく、構造的に再生産されてきたものだ。

このような状況を踏まえると、B'AI Global Forumが当初から繰り返し論じてきた「技術は中立ではない」という認識は、いまや次々と現実の負の事象として可視化されていると言わざるを得ない。すなわち、技術は既存の権力関係や不平等を映し出すだけでなく、日常の隅々に微細な権力として潜みこみ、それらを強化しうる社会的装置なのである。B'AI Global Forumが当初掲げた「ジェンダー平等社会とマイノリティの権利保障という社会目標の実現のために、AIやその他のデジタル技術の開発・研究に取り組む」という目標は、もはや理念にとどまらず、具体的な実装と制度設計を伴って遂行されるべきものとなった。

こうした理論的洗練と実践的課題の双方に向き合いながら、この5年間、B'AI Global Forumは、国内外での研究プロジェクト、授業、シンポジウム、出版などを通じて、メンバー一人ひとりの尽力により、着実な活動を積み重ねてきた。2021年4月に林が理事・副学長に就任した後は、板津木綿子教授がディレクターを引き継ぎ、本プロジェクトを主導して軌道に乗せた。続いて、久野愛准教授がディレクターとしてその活動を継承し、研究をさらに発展させた。また、二人の編集により、東京大学出版会から『AIから読み解く社会——権力化する最新技術』が刊行されたことも、本プロジェクトの重要な成果の一つである。そしてこの間、一貫して矢口祐人教授、五十田みどり学術専門職員が、円滑な運営に努め、事務局を支えた。

人工知能は話題の技術であり、華やかで革新的に映る。しかし実際には、それは人々の日常生活の中に静かに浸透し、社会の構造や価値観と深く絡み合いながら影響を及ぼしている。AIを人間社会にとって良い方向へと導く鍵は、高度な技術開発でも、派手な商品開発でもない。むしろ、人類が歴史の中で培ってきた反省的思考と、基本的人権に根ざしたコモンセンスにあるだろう。B'AI Global Forumの活動は、まさにそれらの視点を学問的に整理し、理論化し、社会に問い続ける試みであった。この営みはいま、グローバルなCritical AI Studiesという大きなうねりの中にある。

今後は、ソフトバンク株式会社の支援を得て、大学院情報学環内の社会連携講座として新たな出発を迎えることとなる。その精神は確実に受け継がれていくであろう。AI研究が真に自律した学問領域となるためには、単なる技術開発を超え、社会的責任を自覚した人文社会科学の視座に根差す学際的研究として深化していかなければならない。それは、AIを人間の未来に資する知へと転換するための、私たち研究者の責務である。

1 新型コロナウイルス対策タスクフォース「国立大学法人東京大学 新型コロナウイルス対策 対処記録 2020年2月28日～2024年3月31日」2024年3月。

2 NHK放送文化研究所「全国メディア意識世論調査・2022」によると、2020年以降、16～29歳ではテレビよりインターネット動画やSNSに毎日接する人のほうが多くなった。若年層以外でもYouTubeやSNSの日常的な利用が広がった。NHK放送文化研究所 世論調査部 渡辺洋子/ 行木麻衣「コロナ禍以降のメディア利用の変化と背景にある意識「全国メディア意識世論調査・2022」の結果から」『放送研究と調査』July 2023。

このほか、海外でも、たとえば、オーストラリアの研究では、ソーシャルメディアを日常的に利用する子どもの割合は、パンデミック前の19年の26%からパンデミック後の22年には85%に急増したという結果がある。Zhou M, Maher C, Brinkman S, Cools J, Dumuid D. Postpandemic After-School Activities Among Youths in Australia. JAMA Netw Open. 2025;8(11):e2543637. doi:10.1001/jamanetworkopen.2025.43637

歴代ディレクターからのご挨拶



板津木 綿子
東京大学大学院情報学環教授
ディレクター在任期間 2022年10月～2025年3月

BAI狂騒曲から協奏曲へ

B'AI Global Forumは、その初めから終わりまでメッセージは一貫していた。AI技術は権力を行使するために人間が使う道具であると。

2026年はAIエージェント時代が到来する、と騒がれている。しかし、この時代を到来させたいと願っているのは誰なのか、誰が何のためにAIエージェント時代を作ろうとしているのか。このような問いはまったく聞こえてこない。AI技術を社会に広く進めようとしている「エージェント（主体）」である人間の動機に目を向けることなく、AIエージェントの良し悪しを語ることはできない。

B'AI Global Forumは、AIに関する語りを常に批判的に捉え、社会で心配ごととされていることが本当にもっとも重要な心配ごとなのか、本来心配しなければならないことは何なのかを探ってきた。

このような問いの立て方に共感してくれる仲間が増えてきたことがB'AIのレガシーである。特任助教、特任研究員、RA、院生メンバー、授業に参加してくれた学生たち、模擬授業で本郷を訪れてきてくれた高校生たち、聴衆者、学内外の関係者、研究者たち。この声がさらに拡がりクリティカルマスに達してはじめて、現在の盲目的な資本主義的利潤至上主義から、人類にとって有益なAI技術へと軌道修正することが可能になる。

2030年までにAI狂騒曲は共創にもとづいた協奏曲に生まれ変わることができるのか。B'AIのレガシーである私たちの行動の真価が問われる。

歴代ディレクターからのご挨拶



久野愛

東京大学大学院情報学環准教授

ディレクター在任期間：2025年4月～2026年3月

B'AI Global Forum締めくくりに向けて

過去6年間にわたり、B'AI Global Forumは、研究分野や組織、そして国境を越えて多くの研究者と協働しながら、ガバナンスや労働から倫理、文化、日常生活にいたるまで、AIが社会にもたらす影響を検討してきた。当初から私たちを突き動かしてきたのは、AI時代における倫理と包摂的な社会を再構想するというミッションである。そのため私たちは、AIとどのように共存していくのかという、シンプルでありながら切実な問いを探究してきた。

AIが社会インフラの一部として存在するとはどういうことなのか。単なる「道具」としてではなく、意思決定や知の構築、さらには日常生活そのものを形づくる存在としてAIと共に生きるとは何を意味するのだろうか。AIは、権力がいかに行使されるのか、責任がどのように分配されるのか、そして未来がどのように想像されるのかを再編成するものである。B'AIは、こうした変化が完全に常態化し、自明視されてしまう前に、それらを批判的に考察するための「場（フォーラム）」として機能してきた。

B'AIがさまざまな活動を通して特に訴えてきたのは、多様な生のあり方をより公平に支えるAIシステムを設計することの重要性である。そのため私たちは、な視点からAIと社会を分析し、ジェンダー、人種、障害、国籍など多様な差異が、技術開発のあり方や技術の用いられ方とどのような相互関係にあるのかに注目してきた。同時に、市場効率や一方向的な技術進歩を優先しがちであった近代の制度や価値体系にも問いを投げかけてきた。

こうした取り組みを通じて、私たちはAIに対する批判的アプローチ、すなわち「クリティカルAI研究」を提起してきた。ここでいう「クリティカル（批判的）」とは、AIを単に拒絶したり、懐疑的にその影響を論じたりすることではない。むしろ、AI技術を取り巻く社会的文脈・権力・歴史に注意深く目を向け、AIの開発やガバナンスのあり方について別様の可能性を想像しようとする姿勢を指している。

クリティカルAI研究が焦点を当てるのは、対処療法的なルール作りではなく、AIがどのような世界観や人間観を前提とし、それを社会の「当たり前」として広めていくのかというプロセスである。その目的は、「望ましい」AIの唯一の正解や基準をあらかじめ定めることではなく、AIが社会に浸透する過程において、どのような価値観が自然なものとして定着し、どの視点や経験が見えにくくなっているのか、そして「望ましい」とされる基準がどのように形成されているのかを可視化することにある。こうした視点は、倫理を単なる「技術開発の足かせ」や遵守状況を確認するための「チェックリスト」に還元するのではなく、技術の設計や開発の段階から社会的問いを組み込み、AIのあり方そのものを根底から問い直すための重要な知的枠組みである。

2025年3月、思いがけずB'AIのディレクターを務めることとなって間もなく、B'AIの活動が残り1年で終了することが決まった。予期せず締めくくりの年となったこの1年ではあるが、ここまで活動を続けてこられたのは、これまでB'AIを引っ張ってきてくださった先生方のおかげである。さらに、多くの実務を担い支えてくれた呉先珍助教、イ・ミンジュ助教、加藤穂香研究員、五十田みどり学術専門職員の存在なくして、B'AIの活動継続はあり得なかった。この場を借りて、改めて四名に深く感謝申し上げたい。

これまでのB'AI Global Forum構成員* (2026年3月以前に退任した者を含む)	
運営メンバー	林 香里、矢口 祐人、伊藤 たかね、板津 木綿子、久野 愛
研究分担者	ティルマン・ハートウィグ、越塚 登、マイルス・ペニントン、大西 晶子、高梨 直紘、江間 有沙、佐倉 統、水越 伸、河原 理子、田中 東子、藤田 結子、横山 広美、山口 利恵
特任助教	武内 今日子、呉 先珍、イ・ミンジュ
特任研究員	左右田 智美、ノ・ジユウン、佐野 敦子、金 佳榮、加藤 穂香
客員研究員	カレン・シマカワ、セザール・カステルビ、リチャード・カーター・ホワイト、アルノー・クラス、李 美淑、章 蓉、田中 瑛、ガリーナ・シンドレイエーバ、何 欣琪
学外協力者	浜田 敬子、小島 慶子、治部 れんげ、山本 恵子、白河 桃子、三浦 まり、三品 由紀子、一方井 祐子、アリッサ・カスティロ・ヤップ
リサーチ・アシスタント	イム ドンウ、加藤 大樹、大井 将生、大月 希望、プリヤ・ム、毛 雲帆、アマエル・コニャック
院生メンバー	ラウリー・華子、エヴァ・ルレイ、ウィル・グスマン、スエダ・マシュー、ジンジャー・ホアン、ヘイデン・ハバード、リュウ・レイジュン
事務局	二神 菜生、五十田 みどり

* 職名は退職時または2026年3月時点

**批判的AI
研究
の深化**

AI技術を社会理論・倫理・文化史・表象論の観点から批判的に検討し、それを技術的検証や社会的実践と接続する研究枠組みとしての「批判的AI研究（Critical AI Studies）」という新たな学術領域を構築し、深化させる必要がある。

**東アジア
諸国の連携**

これまで技術開発の主導権はグローバル・ノース、特にシリコンバレーの巨大IT企業に集中してきたが、近年はアジア諸国でもAI技術開発の進展および覇権争いが高まりをみせている。技術によって再生産される権力関係への批判的応答を行うと同時に、オルタナティブな技術デザインや制度設計の可能性を構想するための知的基盤が必要である。

**分野横断的
な対話の
継続**

AI技術の開発・社会実装の最前線に立つ研究者・実務者と、人文社会科学の研究者が継続的かつ対等に対話・協働する場を制度的に確立し、持続可能な連携をする必要がある。

**B'AI Global Forumの後続組織としての
「社会連携講座」の設立**

これまで培ってきた国内外の研究者ネットワークやCritical AI Studiesの知見を活かし、2026年度からは、「社会連携講座」を通して、主に教育に活動の主軸をおきながらAIの政治的・社会的・倫理的問題についての議論を深めていく。

発行：東京大学Beyond AI 研究推進機構

B'AI Global Forum

発行年月：2026年3月

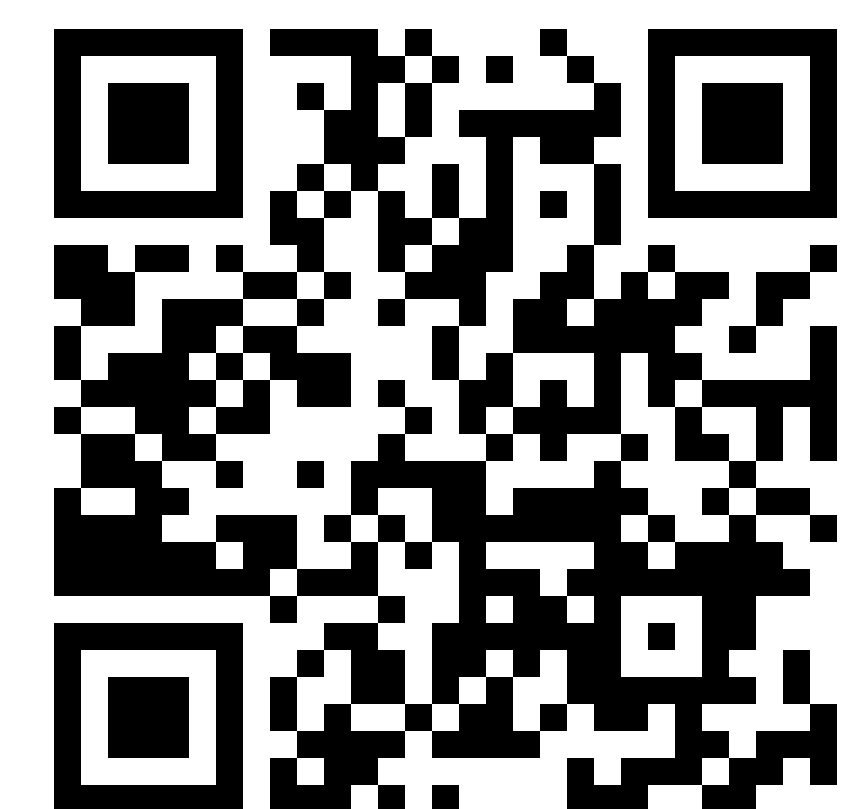
公式ウェブサイト：<https://baiforum.jp>

公式YouTube：

www.youtube.com/@baiglobalforum9317



ウェブサイト



YouTube